



【社畜がある日アリスになった 2】DL販売サンプル

意馬心猿



不思議の国のアリスオマージュ作品

今回の不思議な住人

帽子屋の部下になる前の豚皮仮面青年

自由な三日月ウサギ

真面目な悪党な蜥蜴のビル

全編 233P / 本編 218P

収録、全部で約5万5千文字

《豚の祈りと平凡な紳士》約2万2千文字(純愛、グレイス×アリス+モブ幽霊の悪戯)

《豚の讚美歌》約2万6千文字(グレイスとの続き、三日月ウサギ・蜥蜴のビル登場)

卍《豚と兎と蜥蜴の独断場》約7千文字(別話、三日月ウサギ×アリス ビル×アリス 3P)

アリス♀

金髪碧眼。青いワンピース。白いフリルのエプロン。青い靴。桃色と水色の縞模様の靴下。腰元の名前入りな大きなリボン。自分の記憶が曖昧な女の子。圧倒されていた何かを吹っ切れて大胆な生き方になりつつある。

一人称、私。

お相手ポークタルト(本名グレイス)♂

薄茶色の髪、薄茶色の瞳。帽子屋の部下になる前の豚皮仮面君。素朴そうな色合いの優しい青年。血筋として家を継がなければならないが、あまり好ましく

思っていない。

一人称、目上の相手の時は私、本来は僕。

お相手2 三日月ウサギ

灰色の髪、薄灰色の瞳。目は垂れ目で耳はふわふわの灰色、兎垂れ耳。尻尾も灰色ふわふわ。間延びした軽い口調。自由気のまま美的感性を求めて色々な事柄をするふしがある。

一人称、オレ

お相手3 ジェル

黒髪、緑の瞳。細目。身体の一部に鱗の痕がある。日々、荒くれのお仕事を真面目にこなすが正直、女、子供に手を出したくはない。

一人称、俺 客に対しては私で敬語

- ★純愛(グレイスとの話)
- ★モブ幽霊の悪戯
- ★放尿
- ★生理ネタあり
- ★睡眠姦(半意識あり)
- ★レイプ、ほぼ和姦
- ★戦闘にて狂気R15G含む
- ★グレイスとの純愛エンドとは別にEにて別キャラとの複数プレイあり、もしもくの話
- ★Eにて、アナル、二穴責め
- ★パラレル形式(イメージとしては選択次第の乙女ゲーム風味)
- ★不思議の国のアリスオマージュ

★ハート喘ぎ

不思議な国の住人グレイスに一番最初に出会っていたらの、アリスの平行な一つの物語

あったかもしれない話も収録

## 《豚の祈りと平凡な紳士》

カツンツ。カツンツ。がこんつ！

出勤。行かなければいけない。行かなければ私がやらなければいけない。

「え……？」

ずっと慣れないヒールが排水口の溝に、かかったと思えば白い床石で私の靴は青いパンプスだった。疲れているのだろうか。靴を履き間違えて出勤してしまったらしい。

「出勤……どこへ？」

ぼうつとする頭を捻っていると横奥に大きな鏡が見えた。無言で近づく。鏡には年頃の娘がおり青いスカートの膨らんだワンピースに白いフリルのエプロ

ン。腰には大きなリボンが付いている。

「え、私？ 何、この恰好……」

しやがみ込み、ぴったりとした縞模様の靴下を何となく触る。

「……私って……こんな感じだったかな？」

鏡を、もう一度見上げれば金髪碧眼の娘。

「こんな感じだったような気もするし違うような……」

「ああ！ 遅刻してしまいます！ 急げ急げっ」

「えっ」

声がして後ろを振り向くと二頭身の可愛らしい白兔が小さな扉を通って外に出る所だった。

「う、うさぎ？」

啞然と眺めていれば兎は外に飛び出て扉が閉まる。慌てて近づいて扉を開ければ外下には階段が見えた。

「あれ……？ まって」

ハツとして今いる部屋を見渡す。扉は、この小さな扉以外見当たらない。

「うそ……出られないんじゃない……」

身が、ぞわつとした。小さな扉は兎なら容易に通れたが私には無理だ。太股や肩で突つかかるだろう。

「す、すみませーん！ 誰かいませんか？ すみません……！ 誰か……！」  
何度も外に呼びかけるが木々のざわめきが聴こえるだけだ。返答は無い。

「そんなあ……」

気落ちして無暗やたらと白い部屋を歩く。歩けば机が一つあり机には『わたしをたべて♡』と書かれたチーズと『わたしをのんで♡』と書かれた赤ワインがあった。

「食料……」

この皿に盛られたチーズとボトルに入った赤ワインを飲んで待っていれば誰

か通りかかるまで待てるだろうか。

「……ちよつと変だけど乾いてないし用意してあるってことは人が定期的に来るって事だよね？」

チーズを触り表面が柔らかく、そんなに時間が経っていないという事が予測される。

「叫んで喉は乾いてるけど……お酒で潤うかな……」

空のひっくり返してあるグラスに赤ワインの捻るだけの蓋を開けて中身を入れた。

「コルク式じゃなくて良かった……」

ちよつとした都合の良さに少し気分が上がりながらワインを舌で軽く舐めるだけして、もう一度部屋を見渡してみた。壁を叩いてみても同じ音がする。

「ふう……」

鏡を少しの間見つめて唯一の扉前へ赤ワインとチーズを持って座り込み景観

を眺め。もう一度、赤ワインを舐める。

「お腹は、まだ空いてないし……あれ？」

ふと、扉が少し大きくなった気がした。首を傾げてワインを今度は一口飲む。チーズも一口食べる。

「あ、食べちゃった……無意識ね。ワインとチーズって合うから……」

一口食べると、チーズの美味しさに舌鼓して、つつい食べてしまう。

「あれ……？ 扉小さくなった？」

ワインを飲む。

「……まさか」

不思議な物を口にしてみれば私の身体は小さくなったり大きくなったりする事がわかり調整して、この不思議な白い部屋から出る事が叶った。しかし、これから、どうすれば良いだろうか。目の前には森林が広がっている。無暗に森の中に入るべきか、この部屋の側に居るべきか。迷う。

「あら、よく見たら道があるのね……」

白い建物を囲む森林には四か所、獣道程度の道が見えた。

「……どの道を行けば人に会えるかしら」

道端の適当な棒を掴み縦にして上から適当に落としてみる。棒は方向を示した。

「じゃあ、こっちの道に行ってみようかな……」

ぱき、ざく、ぱき、ざく。

森林の枯れた落ち葉や木々、砂利を青いパンプスで踏みしめて、のんびりと歩けば心地良い太陽の光が爽やかな気分にかけてくれた。

しかし。

「太陽が沈み始めたわ……」

獣道から人が通れる小道程にはなつたが、これといって人の気配はしないし何か新しい建物も無い。

「水場でも、あれば……」

先程の建物にあつた赤ワインとチーズは、あれ以上食すのは怖かつたので置いてきた。食料にするにしても一々大きくなつたり小さくなつたりする訳にもいかない。

「困つたわ……」

脛を瞑り溜息を深く吐きながら足を進めれば怒鳴るような声が聴こえた。

「止まって!!」

「へっ?」

足を止め脛を開ければ、ひゅつと喉が息を吐く。目の前、眼下は何故か断崖絶壁で、もう数歩先に進んでいれば落ちていた事だろう。

「え、え……」

ぞつとし身が震え腰が、へなへなと抜けて、その場に座り込んでしまう。

「お嬢さん気を確かに」

後ろから声をかけられてハツと顔を上げれば橙色の夕暮れを背景に優しそうな青年が顔を、こちらに覗かせていた。彼は、しゃがみ込み言う。

「ここは道に見えますが昔、川が流れて今は干からびてしまった所なんです」  
「か、わ……?」

「水の流れが変わってしまったて……ああ、腰が抜けてしまった? もし宜しければ、お嬢さんに触れても? 休める所に、ご案内します」

「え、は、はい……」

震える身で、こくりと頷けば彼は『失礼』と断って私の腰元と膝裏に腕を入れ持ち上げた。細身そうな青年に見えたが思った以上に身体は確りとしているらしい。ぼんやりと、そんな事を思いながら腰が抜けた身体が少しずつ落ち着くのを感じる。

「今の時期は木苺が取れるので去年は実っていた場所を巡っていたんです」彼の腰元にあるカゴには赤い苺の小さな粒が見えた。

「三か月前に水が干からびてしまったので、もしかしたら、あそこの位置には実って無いかもとは思ったんですが……」

ぼんやりと優しい声色で話す青年を見つめて安心感を感じると固まっていた身を胸元へ預け、その声を聴きながら私は自然と重くなった瞼を閉じた。長い間、パンプスで森林を歩き続け緊張が続いていた中での衝撃から助けてくれたからだろう。身体は急激な疲れを見せて安心感に身は従ってしまう。まるで赤子になって揺りカゴに揺すられている心地良さだった。

丸い月夜。直ぐ近くにあるという自然のお湯が沸き出す場所へとグレイストと向かう。今日、酷使した青いパンプスが枯れ葉や木、背の低い草を潰し砂利と土を固める。

「見えた」

繋いでいるグレイスの手が軽く方向に引っ張るので、そちらに顔を向ければ、どこことなく整えられた露天風呂が存在した。

「グレイスが作ったの？」

「ああ……迷子のアリスは知らないんだね」

「……？」

「僕は物を提供しただけ、この森を調べてくれるのは、ゴースト達なんだよ」  
私は首を傾げた。ゴーストとは何だろう。少し曲がった自分の影が揺らめく。

「ゴーストって……？」

「……生前、一定以上の罪を犯した者がなる呪われた姿かな」

「えっ、その……その人達が何故、森を……」

簡易のむき出しの小屋に辿り着いた。三方面に木の板が重なり屋根も付いて内側には揺り椅子と小さな机に簡易の棚とカゴがある。しかし前方は扉などなく丸見えだ。

「罪人は罪を償う為に彷徨い世界の為に尽くさなければならぬ」

「へ……」

「でなければ浄化されず産まれ変わる事が出来ないんだ」

「……そうなの？ ……その、そのゴーストのまま悪い事はしないの？」

「ふふ……、それは絶対に出来ないから安心して」

「……う、うん？」

頭を優しく撫でられて頷く。グレイスが当たり前な事を子供に言い聞かせるように言うので何だか恥ずかしくなった。どうやら私は常識が抜けているようだ。

「わっ椅子が……？」

「ゴーストが運んでくれてる薄いから見えないかな」

「……？」

簡易の小屋から揺り椅子が浮かび平たそうな岩本へと運ばれていく。

「今夜は、ほら満月が綺麗だろう？ よく見える場所に椅子を置き直してくれてるんだ」

そう説明して、グレイスは自然な動作で私の背中のボタンをプツッと外した。

「え」

私が驚いて背中側に顔を向けながら仰け反ると、グレイスは優しそうな顔で首を傾げる。

「ど、どうしてボタンを外すの？」

「どうして？ アリスは服を着たまま湯へ浸かるのかい？」

「え……あ、あの自分で出来るわ私」

「……自分で？」

「ええ」

「一人で？」

「そうよ」

「本当に？」

「本当に」

「……じゃあ仕方ないか僕は月見でもして待ってしよう」

「あ、ありがとう、グレイス……」

出会った瞬間から感じていたけれど過保護なグレイスに、どぎまぎする。

——……私、子供じゃないのに……

靴と靴下、子供っぽい青いワンピースを脱いで、はたっと思う。そういえば

鏡で見た自分は少女だった。年頃ではあるが大人から見れば十分、子供かもしれない。グレイスは私が不注意で崖下に落ちようとしていたのを助けてくれたのだ。あんな場面を見たからこそ心配で何でもしてくれているのかもしれない。とても良い人だ。申し訳ない。

——……私が、ちゃんと出来る人だって教えてあげなきゃ……!!

そう考えて領き下着も外して湯船に向かおうとして何やら木の桶が浮かんでいるのに気が付いて身が跳ねてしまう。ゴーストだ。ゴーストが何か持っているのだ。

「あ、あの……私、通るので……」

「アリス、先ずは直ぐそこで身体を洗ってから湯へ浸かるんだ」

「えっ!？」

月見をすると言っていたグレイスが何時の間にか横に立っていて固まり、ハツとして身を手で隠す。

「な、な、な……」

「な？ どうしたんだいアリス。何か喉に詰まったかな」

「い、いいえ。詰まってなんかないわ。だって、ええつと……私が裸だから……」  
「裸……そうだね。アリスは綺麗な身体を、しているね」

「え……あの……」

恥ずかしがっている私を気にしていないのか、グレイスは穏やかに褒めて平たい石の上の道を促してくる。

「ま、まって……あの……」

自然な動作で片手が掴まれて私は乳房か股の間かしか隠せなくなり。背の高  
い彼の上からの視線だと乳房の方が先に入るかど頭が考えて乳房の方を片手が  
隠した。

「ほら、ここだ。この桶で、お湯を汲んで石鹸で身体を洗ってから入るんだよ」

「その、あ、ありがとう……あの……自分で洗えるので……」

「でも最初は勝手がわからないだろう？ 先程だって迷ってた。僕に任せて、アリス」

笑顔のグレイスが私を覗き込んで、そう言う。

「い、いいえ、グレイス……大丈夫、今度は大丈夫だから……」

「うんうん」

グレイスは頷いて手を離すと、しゃがみ込み桶に、お湯を汲む。彼は家を出た時のままの服装だ。私は裸。両手で身を隠すが恥ずかしくてたまらない。

「まずは身体を、びっくりさせないように足からかけよう」

「ん……っ」

湯が冷えた私の足首から下を温めた。身に染みる気持ち良さだ。

「あの、本当に……」

ぱしやり。

膝から湯がかけられ。

「グレイス……」

「ああ、震えてるね」

湯で濡れて温かい彼の手が私の太股に触れて身が固まった。男性の手だ。彼の手が私の素肌を晒す太股に触れ湯を反対側の太股上からかけ温かい湯が地面へと流れ落ちていく。私は一歩足を後ずさった。

「ひう」

後ろに触れたグレイス以外の、ひんやりした感触に身が跳ねる。

「ああ、ゴースト、アリスは君達に慣れて無いんだ」

そう言って立ち上がった、グレイスが私を引き寄せて、ゴーストから庇う様

に胸に抱いた。頭が混乱する。善意の行動だ。彼の行動は善意からくるものだ。「ん？ 君らがかけてくれるって？ ……ああ、確かに濡れてしまうね。分かった、そうしよう」

グレイスが私を腕の中に入れながら身じろぐ彼が身を上げて離れると温かみが消えて肌が寒さを感じた。

「ゴースト達が湯をかけてくれるらしい、ちょっと待っててね、アリス」

そう言つて、グレイスは私に背を向けると、どこかへ向かう。私は頭の中に疑問を感じつつも頷いて浮かぶ桶に丁寧に湯をかけられ息を吐いた。

——…ゴースト…そうね、ゴーストがかけてくれる方が…

頭にも湯がかり何やら冷たい手が触れて頭皮を揉むように洗いだしてくれる。しやがんでいた私は瞼を瞑りながら、それに身を任せた。ひんやりしているが

丁寧な洗いは、とても気持ちが良い。他のゴーストが定期的に肩から湯をかけてくれるので寒さも無い。

——……ちよつと恥ずかしいけど、なんか良いな……

スツと手が取られる。ゴーストのひんやりした感触が来ず少し不思議に思ったが泡が皮膚を滑り綺麗にしてくれている感触に従う。髪が終わったらしい横に流されて、そちらでまとめられて持たれている感覚がある。背中を冷たい手が泡を伸ばして洗う。幾つかの手が身体を触りうごめき洗っていない皮膚を残さないとしているのが感じられた。

「んう……っ」

乳房を温かい手が滑り今まで触れられて立ち上がってしまった敏感な中心部を掴んだ。下側から、こしこしと上側、先っぽまで続き。先っぽもまた丁寧に

磨かれた。

「ふう……ふう……」

漏れる息が甘い声になりそう。何処に要るか分からない、グレイスに聞こえる気がして、ぐっと口を閉めて抑えた。するり、つるり、ぬるり。冷たい手の幾つかがお尻を撫で割れ目内を滑る。

「ふぁ♡ んぐ……っ、そこ、だめっ」

ゴーストに小声で呟くが。伝わらないのか手が増えて身体の色々な部分を撫でられるばかりだ。気付いたら、ゴーストに乗って座り込んでいる気がした。身体が妙に熱くなり冷たい手が気持ち良い。

「ひいん……♡」

冷たい手と言うには弾力のある柔らかい何か。私の指先を包み。吸われる感触がした。その内側から出た柔らかさが指の間を伝い。敏感な部分を増やしていく。耳を刺激され音が、にちにちと響く。

「んあ……あ……あ……♡」

頑張つて声を出さないようにしても声が、どうしても漏れ出てしまう。

「ふあ♡」

乳房を触れながら唯一温かい感触が私の口を塞ぎ息が口内に隠る。弾力のあ  
る温かさが私の舌と触れ合い液体が生まれた。

「……んう♡ うう♡」

「ずりゆ、ずりゆ、ずりゆ……」

一度、弾力はあるが固くて熱いモノが私の股の間を滑った。それは腹元に行  
きへソで止まると、ぐりぐりと穴で動き。すぐに熱い液体をへソの穴に入れ込  
んだ。

「う♡ うあ………?」

口が自由になり空気を吸い込んだ。はっと息を吸い。反射的に今まで閉じていた瞼を開けた。見えるのは深い群青色に染まった夜空と眩しい丸い月。頭が、くらくらする。

「あ♡へあ？んあ♡」

瞼を開けたが自分の目に溜まった水分でよく見えない。湯からの熱気だろうか霧なのか視界が曇って、ぼやけている。何だか影のようなモノが見える気がしたが、それよりも気持ち良さに意識が抜けていく。肌の至る所に何か冷たいのが触れて耳は液体がうごめく音で閉ざされたままで乳房も冷たいので吸われ身が、どんどん熱くなる。

にちゆ。

「あふう♡」



☆☆☆続きは本編で！

よろしくお願いいたします。

---

---

## 【社畜がある日アリスになった 2】DL販売サンプル

発行日 2021年12月10日

著者 意馬心猿

<https://www.pixiv.net/member.php?id=8224911>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。

---

---